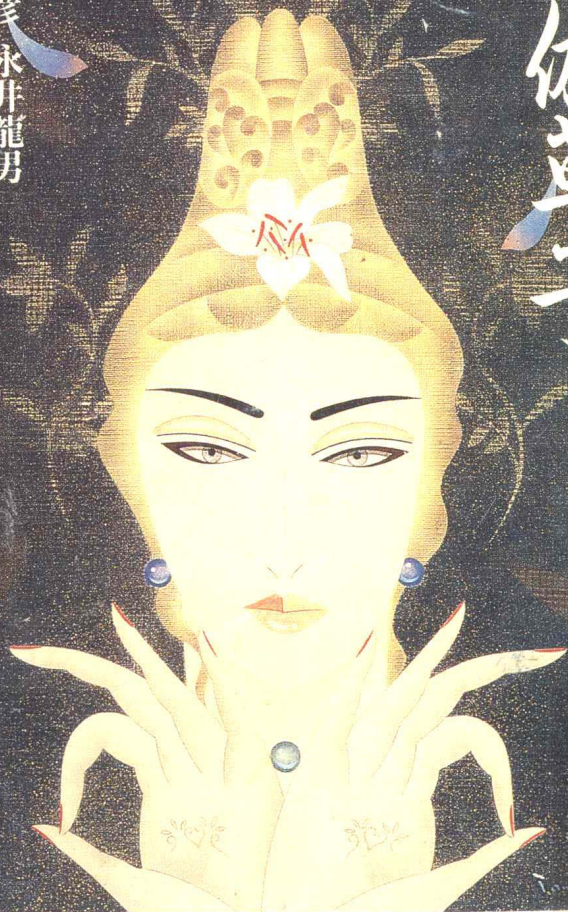


お伽草子

福永武彦 永井龍男
円地文子 谷崎潤一郎 訳



ちくま文庫



ちくま文庫

お伽草子

一九九一年九月二十四日 第一刷発行
一九九二年十月十五日 第三刷発行

訳者 福永武彦（ふくなが・たけひこ）

円地文子（えんち・ふみこ）

永井龍男（ながい・たつお）

谷崎潤一郎（たにざき・じゅんいちろう）

発行者 関根栄郷

発行者 株式会社 筑摩書房

東京都台東区蔵前二一六四 ㊦一一

電話東京五六八七―二六八〇（営業）

五六八七―二六七〇（編集）

振替口座六一四一二三

装幀者 安野光雅

印刷所 三松堂印刷株式会社

製本所 三松堂印刷株式会社

ちくま文庫の定価はカバーに表示してあります。

落丁本・乱丁本はお取替いたします。

© SADAKO FUKUNAGA, MOTOKO FUKE, ETSU
NAGAI, EMIKO KANZE 1991 Printed in Japan
ISBN4-480-02561-8 C0193

江苏工业学院图书馆

藏书章

福永武彦 円地文子

永井龍男 谷崎潤一郎



筑摩書房

目次

文正草子	福永武彦訳	七
鉢かづき	永井龍男訳	一〇
物くさ太郎	円地文子訳	一〇
蛤の草紙	円地文子訳	二〇
梵天国	円地文子訳	二六
さいき	円地文子訳	二五
浦島太郎	福永武彦訳	二六
酒吞童子	永井龍男訳	二七

福富長者物語

福永武彦訳 二〇三

あきみち

円地文子訳 二〇四

熊野の御本地のそうし

永井龍男訳 二〇五

三人法師

谷崎潤一郎訳 二〇六

秋夜長物語

永井龍男訳 二〇七

解説 面白い物語は、なぜ面白いのか 織田正吉 二〇七

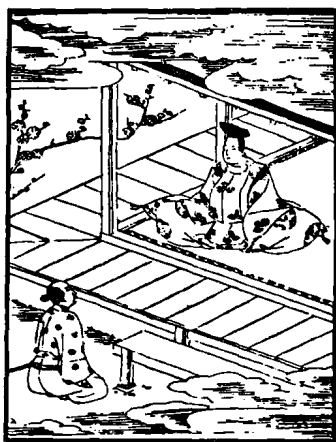
お伽草子

文正草子

昔から今にいたるまで、おめでたい話はかずかずあるが、身分の賤しい者がことのほかに出世して、末ひろがりにおめでたいというのは、常陸ひたちの国の、塩焼きの文正ぶんしょうと呼ばれた者の話にまさるものはない。いざ、それをお聞かせしよう。

常陸の国に十六郡あるうちに、鹿島の大明神というのは、世に聞えた霊社である。そのお宮の神主は、大宮司だいぐうじと呼ばれていたが、すこぶるの大金持であった。東西南北に蔵の数が四万あり、そこに七珍万宝、宝という宝は充ち溢れて、なに不自由のない身の上。家の数は一万八千軒、家来か来の数は多すぎてかぞえきれず、女房や中居なかいはしめて八百六十人。息子は五人いて、いずれも好男子、芸能の才は万人にすぐれた者たちであった。

ところでここに、大宮司殿の走り使いをつとめる小者で、文太ぶんたという男があった。長年の間主人に仕え、身は賤しくても忠義いちずの正直者で、まめまめしく使われていたが、



大宮司殿にどういうお考えがあったのか、あるいはその忠義をためそうとでもお思いになったのか、

「お前は年ごろ私に仕えてはいるが、私の思いどおりに働いているとは見えない。どこへでも行つて、勝手に暮すがよい。よくよく思い直したら、また帰つて来るがよい。」

こう言つて追いはらつた。

文太が思うには、奉公人が千人いようと万人いようと、命のかぎり御奉公申し上げる者は私のほかにはないと思つてつとめてきたが、今はもう是非もない。しかしどこへ行こうと、御主人のことをなおざりに思う私ではない、いずれは帰参のお許しも出ることであらう、と考へて、行方も定めずさ迷ひ出た。

やがてとぼとぼと歩くうち、つのおかの磯と呼ばれる浜辺に出たが、塩焼きのかまから

煙のなびくのがはるかに見える。そこで、とある一軒の塩焼き小屋に立ち寄って、

「もうし、旅の者でございますが、宿を貸してはいただけませんか。」

と頼みこんだ。

その小屋の主人は文太を見て、素姓すじやうも知れぬ怪しい奴とは思ったが、何となく不憫ふびんになつて泊めてやることにした。そうこうするうちに日が経ったから、

「何もしないでいるのも退屈だろうから、塩焼きの薪たきぎでも拾いあつめてはくれないか。」と主人が言うので、

「お安い御用です。」

と承知して、薪を集めたが、もともと力持ちなので、五人分六人分の仕事を一人でやってのけた。主人もたいそうよろこんで、これは重宝な手伝いをやとったものだとはくほくした。

こうして数年が経ったが、そこで文太は自分も塩焼きをして一商売してみたいと思い、「この年月せつせとあなたに奉公しました。そのお手当をねだるというのも何ですが、塩がまを一ついただけないものでしょうか。身の行末も心もとないので、商売してみたいと思います。」

と主人に頼みこんだ。

主人もかねがね不憫に思っていたので、塩がまを二つ、褒美にやった。そこで文太は塩

を焼いて売ったが、この文太の塩はとびきり味がよく、病人は癒り、年寄は若返るほどのききめがある。塩がまから取れる塩の量も、普通のかまの三十倍にもなるほどのめざましきで、文太の塩ともてはやされるうち、たちまち金持になってしまった。幾年か過ぎると、もう押しも押されもせぬ長者となった。そこで、つのおかの磯に住む塩焼き小屋の人々は、みなみな文太の言うことに従った。

文太はそこで名前を変え、文正ぶんしょうつねおかと自称した。七十五町の土地に堀をめぐらし、東西南北に八十三の蔵を建てた。屋敷の棟の数は九十軒。むかし天竺てんしゅくに名の高い須達長者しゅだちやうぢやうもかくやと思われる有様。そこで常陸ひたちの国の者どもは、この噂を耳にすると、お主しゅの身分よりお手当次第、むかしは塩焼きでも今は長者様だと、文正の許を訪ねて使ってもらった。そのため家の子郎等ろうどうの数は三百人以上、召使や草刈り男、下男の数にいたっては、とてもかぞえることはできない。金銀財宝はこの世の天子、と諺ことわざにいうが、まことにもつともである。

ところで文正には男の子も女の子もなかったから、こればかりが心残りと思っていた。話變わがまって大宮司殿が、ある時、昔の文太の出世のことをお聞きになった。不思議なこともあるものと、文太を召し出された。あの時以来久しくおうかがいしたこともないので、文太はいそいそと御殿に向いて、大庭にかしこまっていると、大宮司殿は御覧になって、昔は賤しい身分でも今はたいそうの出世、庭先なんか置くべきでない、いざこれへこれ

へと呼び寄せた。そこで文太が広縁まで近づくと、大宮司殿は、

「人の噂に聞けば、文太は大した長者になって、天子様でも自分には及ぶまいと言っておるそうではないか。そんな勿体ないことをなぜまた口にする。」

と仰せになったから、文太はかしこまって、

「私ごとき賤しい者が、身分不相応に財宝を持っておりますと、つい前後もわきまえ、つまらぬことを口にいたしました。」

と詫びたが、大宮司殿はさらに、

「というのは、どれほどの財宝を持つてのことか。」

とお尋ねになる。

「金銀綾錦、七珍万宝、どれほどあるのかかぞえきれませぬ。また宝を入れる蔵の数も、東西南北、見渡すかぎりでかぞえきれませぬ。」

と答えた。

「それはまことにめでたい話だ。して、あとりの子供はあるのか。」

「まだございませぬ。」

「それは残念なことだ。人と生れて、子宝にまさる宝はない。神仏に祈願して、一人なりとも子宝をさずかりなさい。」

このようにさとされて、文太はもっともと思ひ、家に帰るや、理不尽にも女房に当り散



らして、すんでのことに女房を追いつ出そうとした。女房がびっくりしてわけを尋ねるので、文正も氣を取り直し、

「大宮司殿が、我々に一人の子もないことを残念がっておいでになる。急いで子を産んでもらいたい。」

と頼んだので、女房もあきれて、

「はたちや三十の頃でも恵まれなかった子宝が、四十にもなって授かるものですか。そのことだけはとても駄目です。」

と答えた。

文正はもっともと思ひ、大宮司殿も神仏に祈願しろと仰せになったことを思ひ出して、「それでは神仏に願を掛けてお願い申そう。」と相談したから、女房もうなずいて、それから七日間、精進しょうじんを重ねて、鹿島の大明神へ参詣した。いろいろの宝物を差し出して、三十

三度の礼拝をし、

「どうか一人の子供をお授け下され。」

と祈った。

満願の七日目の夜中に、ありがたや、御宝殿の扉がするすると開き、その中からいとも気高い御声が、

「お前たちがあまり一心に祈願するので、この七日間に限なく探し求めたが、どうにもお前たちの子供が見つからぬ。しかし哀れであるから、これを授けよう。」

とお告げになったかと思うと、蓮華を二房たまわった。それとともに御声の主は、かき消すように見えなくなった。

そこで文正はよろこびいさんで、

「関東八か国にも二人としない立派な男の子を産んでくれ。」

と女房に頼んだ。

女房は九か月の苦しみの末、十月^{とつき}になってお産をしたが、生れたのは三十二相ととのつた玉のような姫であった。見るから文正は腹を立て、

「約束したかいもなく、女を産むとは何ごとだ。」

と当り散らしたが、年かさの女どもが、

「姫君のほうか、行末繁昌しておめでたい限りでございますよ。」



と取りなしたから、

「それでは屋敷に入れよう。」

と文正も納得して、大事に可愛がった。乳母やお付にも、綺麗な女たちを選んで姫につけてやった。

その次の年に生れたのも、これまた匂うばかりの姫御前であった。文正が、

「今度は？」

と訊くので、

「同じく姫。」

と答えると、文正はすっかり腹を立てて、

「この前は約束を違えても我慢したが、重ね重ね人の言いつけにそむくとは心憎い。その子連れて、さっさと出て行きなさい。」と叱りつけた。

そこで御前に居らぶ女たちが、

「これが男のお子ならば、結局は大宮司殿に

使われるだけでございましょう。眉目^{かめ}かたちのすぐれた姫君ならば、どこの国の大名がたがお躰さまにならないとも限りませぬ。ひよっとして、大宮司殿の公達^{きんだち}がお躰さまに見えるかもしれない。姫君のほうがどれほどかしあわせでございますよ。」

と口を揃えたから、文正ももっともとうなずいて、
「それでは屋敷に入れよう。」
と承知した。

見れば、姉御前より一段と美しかったので、乳母やお付にも、綺麗な女たちを選んでつけてやった。姫たちの名前には、夢のお告げに蓮華を授かったのに因んで、姉は蓮華^{れんげ}、妹は蓮御前^{はちごぜん}とつけた。大事に養い育てるうちに、いつしか年月が経って、光り輝くほどの美しい姫君に成長した。読み書きをはじめ、歌も文章も巧みで、二人ながら賢いことは驚くばかりであった。

これを聞き伝えた八か国の大名たちは、ぜひとも嫁にもらおうと、心のたけを打明けた手紙を送った。しかし姫たちにしてみれば、どうしてこんな辺鄙^{へんぴ}な東国に生れたものか、もし都に近く生れてでもいたら、女の身として、女御^{にようご}やお后^{きさき}の位をも望もうものを、田舎大名の奥方などに貰われてなるものか、と考えていた。文正は、国中の大名からやいのやいのと催促されるので、得意になって姫の気持をたずねたが、どうして耳にも入るものではない。そこで父母も、我が子ながら氣に染まぬものはしかたがなかりうと、言うまま